

第5回「ことば」フォーラム

「ことば」ってなんだろう？

2001年5月12日(土)

国立国語研究所 講堂

井上 優 (国立国語研究所)

植木 正裕 (国立国語研究所)

三井はるみ (国立国語研究所)

独立行政法人 国立国語研究所

## 【あいさつ・趣旨説明】

司会（吉岡 泰夫） 今日久しぶりに五月晴れのさわやかな天気になりました。第5回国立国語研究所「ことば」フォーラムによろこおいでいただきました。これから、「ことば」ってなんだろう？というテーマで、皆さんが普段から、言葉にいろいろ疑問を感じていらっしゃる場所を話し合いたいと思います。まず、研究所の3人の研究員が発表します。それをきっかけにして、皆さんから存分にお話をお聞かせいただいで、私どもも分かっていることをお伝えしたいと思います。私、司会を務めます吉岡泰夫でございます。それでは早速、国語研究所の所長の甲斐睦朗<sup>あいさつ</sup>が御挨拶申し上げます。

甲斐 本日はよくおいでくださいました。平成13年度の4月から、国立国語研究所の名称が少し長くなりまして、上に独立行政法人という言葉が付きまして。したがって、独立行政法人国立国語研究所という名称になっております。その付いた意図としましては、私どもの研究所が国民の役に立つように、というようなことだと思っております。私どもは国語審議会に必要な資料を提供いたしていたわけですが、それが無くなりましたので、今度は私どもが全国の皆さんに、いろいろと直接に働きかけて聞いていただくこともしないといけないというわけでありまして。したがって、私ども国立国語研究所としては、第一に日本語の将来を見て、どういう調査が必要かということで、調査研究を行います。それと同時に、その成果をできるだけ全国の皆様に聞いていただく、分かっていたく、そして考えていただく、こういうようなことも行いたいと思っているわけでありまして。その一つが、本日開いております「ことば」フォーラムであります。この「ことば」フォーラムは、今年度から年に5回ずつ開催いたします。東京だけではなくて、よそにも出かけていって開催するわけですが、東京で行なうときには、主としてこの講堂で行なうことにいたしております。いろいろな様式を考えておりますが、今日は「ことば」ってなんだろう？という、若い方にも、またお年を召した方にも考えていただくのにふさわしい内容を用意いたしております。私どもが、その結果、日本語のあり方に対して何らかの処方箋<sup>せん</sup>というものを発行できるとよいわけですが、先ほど申しましたように、昨年までは処方箋を発行するのは国語審議会でありました。私どもは資料を提供する所であったということで、今日は考えていただく材料をあれこれと提供するというところに行くのではないかとこのように思っているわけでありまして。どうぞ、先ほど司会の吉岡が申しましたように、後でいろいろと御質問も御意見もたまわりたいと思っております。

す。以上、開会にあたりまして御挨拶いたしました。(拍手)

**司会** それでは早速、今日の会の進行について説明いたします。御手元の資料を御確認いただきしたいと思います。「ことば」ってなんだろう? という表紙が付いたものがあります。それから「質問票」というのがありまして、その下に「ことばフォーラムアンケート」というのがあります。更に、『国語研の窓』という私どもの広報紙が付いていると思います。今日は、井上優、三井はるみ、植木正裕、の3人の研究員が、「ことば」ってなんだろう? ということで、言葉に関する日常の素朴な疑問に端を発して、言葉のいろいろな面を考えていくという発表をいたします。それが3時15分までです。時計は前の方に、私の後ろにあります。少し遅れておりますが、これに合わせて進めていきたいと思っております。そして、3時15分から3時35分まで休憩に入ります。その間に、今お渡ししましたその質問票、これを御記入いただきしたいと思います。質問票は大きく二つに分かれております。3人の発表の内容に関する御質問を上の方に書いていただきたいと思います。それから、今日お集まりいただいた方は「ことば」ってなんだろう? というポスターの標題にありますとおり、ふだんから言葉に関心があつて、こんなことはどうだろう、というふうにお考えのことがあるかと思っております。そちらは下の2番、「その他、言葉に関する質問」というところに簡単にお書きいただきたいと思っております。その質問票は、休憩時間のちょうど真ん中、3時25分までに、後ろの回収箱に入れていただきたいと思っております。そして、3時35分から質疑応答に入ります。そこで存分に疑問、あるいは御意見をぶつけていただきたいと思っております。質疑応答の時間は25分となっております。挙手なさると、マイクが回ってきますので、それで御発言ください。どうぞお気軽に御質問、御意見をおっしゃっていただきたいと思っております。それから、アンケートですが、我々は「ことば」フォーラムを企画するに当たって、なるべくおいでの方々の御要望にお応えできるような企画を考えたいと思っております。ですから、どうぞ御意見をお聴かせいただきたいと思っております。そちらも併せてよろしく願いいたします。それでは早速、3人の「ことば」ってなんだろう? というテーマの発表に入ります。最初、井上優がお話申し上げます。では、よろしく申し上げます。

「ことば」ってなんだろう?

井上 優、三井 はるみ、植木 正裕

(配布資料：p. 1～4, 図1、図2)

**井上** 皆さん、こんにちは。日本語教育部門の井上と申します。今日は大変天気が良くて、

こんな日に、「ことば」ってなんだろう？」という重いタイトルで、気が重くなっている方もいらっしゃるかと思いますけれども、材料そのものは結構楽しいと思いますので、是非お気軽に言葉について考えていただきたいと思います。今日のテーマの「ことば」ってなんだろう？」というテーマですが、これはいつものフォーラムと少し趣が違います。今日はいわば、「ことば入門」という感じでお聞きいただければいいかと思えます。少し抽象的ではありますが、題材自体は具体的ですので、具体的なテーマを基に、少し抽象的な、ある意味では少し重い、そういうテーマについて、皆さんと一緒に考えていきたいと思えます。入門編とはいっても、言葉の研究の入門をやろうというわけではないです。今日は「ことば」というのはどういうもので、私たちはその「ことば」というものとどういふふうにして付き合っていくのが我々にとって幸せか、ということ、少しばかり考えてみようということです。「ことばとは何か？」という問いを聞いて、どんなイメージが思い浮かぶでしょうか。おそらく、余り具体的なイメージはわからないのではないかと思います。それはなぜかというと、「ことばとは何か？」という問いが我々の日常生活とは直接関係ない、ということではないかと思えます。少し皮肉っぽい言い方をしますと、ちょっと高尚な感じがするわけです。例えば、実際私たちは「ことばとは何か？」ということを考えながら、普段しゃべっているわけではないわけです。そんなことを考えなくても、我々は十分言葉を使えるわけです。同じことは、例えばカラオケで歌をうたうときにも言えます。「音楽とは何か？」などと考えながら歌を歌うわけではありません。それから、釣銭の計算をするときも、「数とは何か？」「数学とは何か？」「計算をすることはどういうことか？」などということは考えません。それと全く同じことで、「ことばとは何か？」などと考えなくても、我々はちゃんと日本語を使えるわけで、ですから、直接、我々の生活には、「ことばとはなんだろうか？」などと考える必要はないわけです。何を隠そう、私たち日本語について研究を行っている人間も、実は余り、常に研究しながら「ことばとは何か？」などということ考えながら研究しているわけでは、必ずしもありません。それは例えば、野球選手が「野球とは何か？」などと考えながらプレーしているわけではないのと同じです。つまり、我々研究者にとっても、その「ことばとは何か？」という問いというのは、結構重い、すぐに「こうだよ」というふうに答えられる、そういう問いではないのです。今日考えようとしている「ことばとはなんだろう？」という問いは、実はそういう問いなのです。しかし、私たちは日常生活のいろいろな局面で、その言葉について素朴な疑問を感じる

ことがあります。そしてそういう素朴な疑問の中には、実は「ことばとは何か？」という問いと深いところで結びついている、そういうものが少なくありません。今日のフォーラムでは、そのような素朴な疑問を題材にしながら、「ことばとは何か？」ということについて少し考えていきたいと思います。まず、「日本語ができるということはどういうことか？」について、ちょっと考えたいと思います。これに関連する素朴な疑問としては、「私たちは日本語ができるのに、どうして国語の勉強をしなければならないのか？」というものがあります。学校で勉強しているときに、だれでも一度ぐらひは感じたことがあるであろう素朴な疑問です。国語の先生がいらしたら申し訳ないのですが、私も、小学校、中学校、高校と通して、なんでこんなことしなければいけないのだろうかということは、時々思ったものです。算数とか英語、これはいかにも勉強という感じがします。できないことをできるようにする。つまり計算はほうっておいてもできるというものではありません。練習しないとできない。英語もそうです。やっぱり勉強しないとできない。では、国語はどうでしょうか。国語でも、古文や漢文、あと漢字というのはやはり勉強です。しかし、私たちの普段使っている現代日本語、いま私がしゃべっているような言葉を対象にした、いわゆる現代文。我々が高校生の際は現代国語、略して「現国」といいましたけれども、これは余り勉強という感じがしない。実際、国語の先生には申し訳ないのですが、私が高校生の際は、現国というのは暗記がいらぬ、予習もあんまりしなくていい、ちょっと息抜きの課目というか、そういうところがなんとなくありました。しかし、そういう雰囲気のあるのはある意味ではもっともなことです。つまり、計算というのは練習しなければできない。英語も勉強しなければ読み書きできない。ですから、算数、英語はできないことをできるようにする。分からないことを分かるようにする。もう目標がすごくはっきりしています。しかし、国語はあまりそういう感じがしない。余り目標がはっきりしない。何で国語の勉強をしなければいけないのか。これはある意味では非常にもっともな、自然な疑問だと思います。日本語が話せるのという、その「日本語ができる」というのは、一体どういうことか？ まずこれから考えてみたいわけです。「ことば」というのは、一定の仕組みを持った一つのシステムである。ここですね。一定の仕組みを持った、一つのシステムである。ということがあります。私たちは、同じ日本語というシステムを共有して、お互いにコミュニケーションをとっています。そして、日本語ができるというのは、日本語の仕組みというものがあって、その仕組みを習得している、ということにほかなりません。では、その

仕組みというのは一体何でしょうか。それを知るのに、ちょっと簡単な実験をやってみたいと思います。これから二つの言葉を、順番に言っていただきます。そしてそれが同じ単語か、それとも違う単語か、ということをおもって考えてみていただきたいと思ひます。では、お願ひします。

(音声)「たまご (破裂音)」「たまご (鼻濁音)」

もう1回、お願ひします。

(音声)「たまご (破裂音)」「たまご (鼻濁音)」

もう1回、ゆっくりお願ひします。

(音声)「た・ま・ご (破裂音)」「た・ま・ご (鼻濁音)」

どうでしょうか？今の二つの「たまご」を聞いて、意味が同じか、違うかということですよ。恐らく、答えは、どれを聞いても「たまご」ですね。次です。もう1回やってもらひますけれども、ちょっと違ひます。聞いてみてください。

(音声)「たまご」「たまご」

もう1回、ゆっくりと。

(音声)「たまご」「たまご」

どうでしょうか？「たまご」「たまご」ですね。さっきと違ひて、今度は意味が違ひということが分かると思ひます。つまり、「たまご」というのはこれですね。食べる「卵」です。ですが、その次に言った「たまご」というのは、東京にある「多摩湖」ですね。意味が違ひてしまうわけですよ。実は、今は三つの発音を使い分けました。まず、「たまご」の「ご」ですね。それから、「たまご」の「ご」です。これは明らかに違ひる音ですね。いわゆる濁音とか清音とかいつている違ひです。日本語では、その清音か濁音かという区別はとても大事な区別で、これで意味が違ひてしまひます。もつとも、例えば、「1階、2階、はい次は？」と言ったら、「3階 (さんがい)」という人と「3階 (さんかい)」という人がいます。これは意味が違ひらないのですが、これはまた別の話になります。その次ですね。「たまご」の「ご (破裂音)」と、「たまご」の「ご (鼻濁音)」ですね。今は少し大きめにやりました。発音するとわかりますが、違ひる音です。「ご (破裂音)」と「ご (鼻濁音)」では全然違ひる音です。「ご (鼻濁音)」という方は、いわゆる「鼻濁音」と呼ばれる音で、鼻に息が抜けます。鼻をつまんで「ご」というと言えませんか、鼻に息が通っていることが分かると思ひます。これに対し、「ご (破裂音)」というのは鼻に息が抜けません。ですから、鼻を閉じて、ご (破裂音)」と普通どおり

に言えます。「ご（鼻濁音）」とは発音が違います。「たま・ご（破裂音）」と「たま・ご（鼻濁音）」とでは発音が全然違う。しかし、単語の意味が変わるかという点と、変わりません。「たまご（破裂音）」と「たまご（鼻濁音）」で、別の単語か？そんなことはありません。どちらも「卵」です。ちなみに、私の発音は「たまご（鼻濁音）」です。確かに、「ご（破裂音）」も「ご（鼻濁音）」も、濁った音ではある点では同じと言われるかもしれませんが、まさにそのとおりで、日本語では、単語の途中の「ご（破裂音）」と「ご（鼻濁音）」というのは、意味の区別に関係ない、同じものということになってしまうわけです。このように、音の違いには二つのタイプがあります。一つは、音が違って、かつそれに伴って意味も変わるという区別です。非常に重要な違いです。意味が変わってしまうわけですから、間違えると困ります。もう一つは、意味の区別に余り関係ない、音が違って意味が変わるわけではない、違うことは違うのだけれども、余り大して重要ではないという違いです。同じく音が違うといっても、随分重みが違うわけです。もちろん、例えば「ご（破裂音）」と「ご（鼻濁音）」では、「たまご」と「たまご」では意味が変わりませんが、例えば歌を歌うとか、能や狂言などの場合は、やはり「ご（破裂音）」と「ご（鼻濁音）」では価値が全然違います。歌を歌うときには「ご（鼻濁音）」の方がよく響くというようなことがあります。しかし、それは言葉の意味を区別することとは違います。確かに「ご（破裂音）」と「ご（鼻濁音）」の区別が大事な分野もあるわけですが、言葉の基本的なシステムという点からすると、単語の中の「ご」と「ご」の区別は大した違いではありません。このように、「日本語ができる」という時には、ここが間違ったらいけないという重要な違いと、ここは違っても大したことはないという余り重要ではない違いを無意識的にきちんと区別できる、ということがあるわけです。何が重要な違いで、何がそうでないかというのは、言語によって違います。例えば、お隣の中国語では、息が出る音がするかしらないかで意味が違います。例えば、「パン」です。「パン（無気音）」は「半分」の「半」です。これに息の音を加えて、「パン（有気音）」と発音すると「判断」の「判」です。意味が全然違います。日本語の場合は、「パン（無気音）」と言っても「パン（有気音）」と言っても「パン」です。少し強調して言うと息の音がしますが、「パン（無気音）ちょうだい」というのと、「パン（有気音）ちょうだい」というので、もらう物が違うということはありません。日本語では、「パン」か「パン」かの違いは、意味の区別に関係しない、余り重要ではない違いになりますが、中国語では重要な違いです。重要な違いか、余り重要ではない違い

かというのは、言語によって違うということです。もし、中国語ができるというのは、例えばこのような音の違いを意味の違いと結び付けて理解できるということです。中国語ができないというのは、それができないということです。重要な違いと余り重要ではない違いを区別できるということは、言葉のシステムということを考える上で非常に重要なことなわけです。言葉にはもう一つの重要な側面があります。それは「構造がわかる」ということです。我々が言葉を見たり聞いたりするときには、常に意味を伴って聞いています。言葉を意味のない記号や音の連続として見たり聞いたりすることは余りありません。漢字をじっと見ていると、単なる棒と線のつながりとしか見えなくなることがあります。しかし、パッと見たらもちろん意味のある漢字に見えます。普通使っている分には、言葉はすべて意味を伴ってきます。しかし、よく考えてみると、我々がしゃべっている言葉は、つまるところは音の連続にすぎません。例えば、「こくりつこくごけんきゅうしょにいく」。これを聞くと、いかにも言葉という感じがしますが、これを部分的に音を入れ替えて「つりこくごこくきゅうしょけんくいに」というと、訳が分からなくなります。どちらも音の連続は音の連続ですが、何かが違うわけです。これは、我々は適当な単位に切って理解ができるということです。「こくりつ」「こくご」「けんきゅうしょ」「に」「行く」と切って、それぞれの音に単語を割り振ることができる。つまり構造が分かる、これも日本語ができるということの非常に重要な側面なのです。似たような例として、例えば「にわにわにわにわとりがいる」「すもももももものうち」というのがあります。どこで切れるかがわからないと何のことかわかりませんが、我々は、アクセントなどいろいろなことを手がかりにして無意識のうちに判断を行い、「にわ・には・にわ・にわとりがいる」「すももも・ももも・もものうち」と切ります。先ほどの「つりこくごこくきゅうしょけんくいに」のようにどこで切ったのか分からないということはありません。今、「ことばができる」ということについて、二つのことを言いました。「重要な違いとそうでない違いの区別ができる」ということと、「構造が分かる」ということです。言葉の仕組みというのは、つきつめて考えれば「区別できる」「構造が分かる」ということの知識の集合です。私たちは子どもの時に、そのような知識を無意識のうちに身につけ、大人になった現在でも使っているわけです。ここで、ちょっとコンピューターを使った実験を、あそこに座っていらっしゃる植木さんにやっていただきます。今の話と関係する日本語の、我々はどのようにして構造というものを理解しているかという、そういう話です。では、お願いします。

植木 今構造の話というところで、画面に出ているとおり、音の上がり下がりがキーになって、どういうふうに単語を切っていくかというところまで、例で見させていただきましたけれども、これから私がお見せするのは、もうちょっと文全体に関わるような、大きな構造の話です。具体的には、ちょっとコンピューターを使って簡単な実験をしてみようと思うんですけれども、私たち人間が、言葉をどうやって理解するか。それを直接考えるのはなかなか難しい問題ですので、コンピューターに言葉を理解させる。そしてコンピューターがどう処理して、うまくいくのか。失敗した場合に、どういうふうに失敗するのか。それを見て、そこから逆に、人間は本当はどういうことをしているのか。コンピューターがどういうことをしたらもっと、本当はそこをうまくできたはずなのかというところを、皆さんに是非見ていただきたいと思います。具体的には、画面に出ていますけれども、「音声認識ソフト」というものを使った実験です。最近、コンピューターのお店などでもデモなどをやっていますので、ご覧になったことがあるかもしれませんけれども、音声認識ソフトというのは、私たちがこうやって声でしゃべったものを、コンピューターが聞いて、それを画面の上に文字の形で表示してくれるようなソフトです。今日は試しにこれに、このような「あしたは国研に集まってください」という文を聞かせて、どういうふうにそれを判断するか、というのをちょっと見てもらいたいと思います。

「あしたはこっけんにあつまってください。」

「あしたは、こっけんにあつまってください。」

ちょっとすみません。こういう広い部屋ではどうもマイクが入りにくいので、ときどき失敗をしてしまうのです。

「あしたはこっけんにあつまってください。」

「あしたはこっけんにあつまってください。」

ちょっとコンピューターがなかなかうまくできない、というのが画面で分かると思いますが、実は、うまくいかないということを見ていただきかったので、ちょっと実験はこんなところで、話を先に進めていきたいと思います。こういう広い会場ですとうまくいかない面があるのですが、実際に同じソフトを使って、事前に何回かやってみたのですが、そうすると画面に出ているような結果を、コンピューターというのはよく出してくれます。1番目は、「あしたは国権に集まってください」。音は合っているんですけれども、「こっけん」のところ、集まるにしてはちょっと変な単語が入ってますし、

2番目、3番目は、「こっけん」の部分が「こっけい」だとか「こうけん」というふう  
に、ちょっと似てはいるんですけども、微妙に違うような音の単語が入っているのが  
分かると思います。でもいずれも、人間がパッと見て、なんかおかしい結果が出てくる  
な、というふうに感じられると思います。ちなみに、ご存じでない方もいらっしゃるか  
もしれないのですが、私たちが今仕事をしております国語研究所のことを、略して<sup>こっけん</sup>国研  
と呼びます。漢字はこういうふうに入りますが、コンピューターはこういう出  
力はできなかったわけです。人間の場合でも、例えば「あしたはこっけんを集まってく  
ださい」と言われて、「こっけん」というのは何かを知らなかった場合には、すぐに一  
番下のような正しい答えが出てくるとは限らないわけですが、だからといって人間が、  
上の三つのような答えを頭の中で思い浮かべるかということ、そうではありません。それ  
で、人間の場合だったらどういう反応が返ってくるかということを考えてみたいと思  
います。まず、その「国研」ということを知らなかったために、全体がもうわけが分  
かなくなってしまったのでしたら、「えっ、今なんて言ったんですか？」というふう  
に問い返すのが普通だと思います。そして、大体聞き取れたのだけれども、ちょ  
っと自信がなかったのだったら、「え、こっけいですか？」とか、「え、こっけん  
ですか？」とか聞き返す。あるいは、音は聞き取れたと思ったのだけれども、な  
んだか意味がよく分からなかったという場合には、「え、こっけんって何ですか？」  
とか、あと「こっけんって、どう書くんですか？」とか聞く場合もあるかと思  
います。更にもう一歩先を考えてみると、「え、こっけんってどこにあるんですか？」  
という問いも、人間の場合だったら出てくると思います。特にこの一番下の「こ  
っけんってどこにあるんですか？」というふうに、人間だったら聞き返す可能性  
があるわけですが、そこで、「こっけん」という知らない単語であるにもかかわ  
らず、そこで、もう場所だということを前提として次の話を進めていくところで、  
コンピューターとある意味で決定的に違う部分があるというのが分かっていた  
だけかと思えます。人間はこういう反応をどうやって返すのかということ  
を考えてみると、人間の頭の中には、画面に出ているような、こういう情報  
があるというふうに考えることができます。「集まる」というのは、例えば人  
とか組織、動物などが、ある場所から、ある場所に集まるという、「集まる」と  
いう単語と、他のところでこういう関係を持って、言葉の中には出現してく  
るといのが、人間の頭の中には情報としてあるわけです。ですから、「こっ  
けんを集まる」といった場合に、「こっけん」という単語を知らなくても、「に」  
ときたからにはそれは場所であるというふう

に、人間は判断しているわけです。そのことを考えますと、ではコンピューターの方にも、この画面に出ているのと同じような情報、例えば「に」ときたら、その前には場所を表す言葉が来るはずだという情報を与えてやればうまくいくのではないかと、というふうに考えられるわけですが、そうすると、先ほどお見せした結果ですと、一番上の「こっけん」だとか、2番目の「こっけい」、3番目の「こうけん」なんていうのはどれも、場所を表す単語ではありませんから、コンピューターは自分が知っている単語を探してきて、ああもうこっけんというのは何だか分からない、というふうになって、そのまま失敗してしまって、「では、こっけんというのはどこなんですか？」というふうに聞き返すことはできないわけです。そういう意味で人間というのは、こういう文をパッと見たときに、先ほどお見せしたような、こういう構造を頭の中にパッと思い浮かべて、次の反応を返していくわけです。コンピューターに、仮にではこういう情報を与えたとしても、コンピューターはまだこれだけでは、言葉というのを正しく理解したり使ったりすることはできません。これは、例えば次のように、今の定義がうまくはたらくのかということで、ちょっと別の側面からまた考えてみたいと思いますけれども、例えば、こんどは「集まる」ではなく「置く」という動詞ですけれども、「この本をあそこの机の上に置いてください」、これは日本語として、ごく普通の正しい文章だと皆さん思われると思います。先ほどの「集まる」と同じように、「置く」の場合にも頭の中には構造に関する情報がありますから、この場合、「置く」でしたら、「ある場所に置く」というふうになりますから、ちょうど先ほどの「集まる」と同じですけれども、「に」というのは場所を表す言葉と結びつくというふうに、頭の中に情報が入っているわけです。そしてこの文とその下の構造の情報から考えると、「あそこの机の上」というのは場所を表す表現、というふうに当然考えられるわけです。先ほど、「集まる」の構造では、場所に集まるという情報が付いていましたし、「あそこの机の上」というのは場所を表す表現なわけですから、コンピューターはこういうふうに考えるわけです。「あそこの机の上に集まってください」、これは正しいはずである。でも、当然これは正しいはずがなくて、人間であれば、「えっ、机の上なんかには集まれるはずがないのに」というふうに、すぐに分かるわけですね。そうすると、先ほどの「集まる」場合の場所と、「置く」の場合の場所。同じ場所を表す表現ですが、どういった表現がその場合に使える場所の表現であるかというのは、個々の動詞によってすべて違って来るわけです。そうすると、コンピューターに言葉を教えるためには、「集まる」ときの場所というの

はこういう場所とかこういう場所があって、「置く」の場合の場所はこういう場所やこういう場所。ですから、例えば、「あそこの机の上」というのは「置く」の場合には使えるけれども、「集まる」の場合には使えないという、そういうのを全部、個別に情報を教えていかなければいけなくなってしまいます。現実的にはそういうことは難しいわけで、コンピューターに言葉を理解させようと思っても、こういうところがかなりネックになってくるわけです。今までいくつか例を見ていただきましたが、そのことから逆に、「人間が言葉を理解するときというのはどういうことをしているのか？」というのを簡単にまとめてみますと、先ほどの例えば「集まる」であるとか「置く」という、一つの言葉だけで判断しているのではなくて、その前後に出てくるいろいろな言葉の関係、構造みたいなものを利用している。さらに、さっきの場所の例でも分かるように、そういう情報というのはかなり個別的で詳細な情報というのを、実は持っていて、利用しているということが分かると思います。ただ、コンピューターと決定的に違ってくるところというのは、そういう関係とか構造に関する部分、あるいはそれぞれの情報というのを、理解するためにどうやって使っているのか、そして何をその場合使ったのかというのは、私たちの無意識のレベルでやっていること。ですから、例えばさっきの「置く」場所には、「あそこの机の上」はOKだけれども、「集まる」の場合にはだめ。では、どうしてかと言われると、なかなかそれをきちっと言葉で説明するのは難しいという意味で、こういう処理というのは人間の無意識のレベルで処理していることだというのが分かっていたのではないかと思います。

**井上** ありがとうございます。今のお話からも、私たちが言葉を使うときというのは、無意識のうちに結構いろいろなことをやっていることがわかります。今植木さんが挙げられた例というのは、非常に単純な例です。ですが、実際に私たちが聞いたり話したりしている文というのは、大変複雑な構造を持っています。長くて、構造も複雑です。先ほどコンピューターはちょっと間違えましたが、これは例えば音が響くとか、いろいろな要因があります。それにコンピューターは対処できない。でも、我々は違います。我々はどんな場所に行こうと、お風呂場で話そうと、どこかの防音室、全然響きのない所で聞こうと、全然それは関係ないわけです。我々は結構すごいことをやっているわけです。区別ができるとか、構造が分かるというのは、結構すごいことなのです。しかし、もっとすごいことがあります。それは、「区別ができる」「構造が分かる」ということを、我々は一生懸命訓練して身につけたわけではないということです。母語というものは、子

もの時に自然に身についたものです。例えば、「たまご (卵)」と「たまこ (多摩湖)」, これは違います。しかし、「たまご (破裂音)」と「たまご (鼻濁音)」, これは違いません。このようなことは、学校で習ったわけではありません。「国立国語研究所に行く」, 「あしたは国研に集まってください」といった文の構造も、誰かから教わったわけではありません。いずれも、私たちが子どもの時に自然に身につけた言葉の仕組みというのを使っているわけです。それで、子どもの時に身につけたもの、それが言葉のすべてかという、それは違います。言葉には、今まで述べてきたような、子どもの時に自然に身につけられる、そういう部分と、そうではない部分があります。つまり、何らかの訓練とか勉強によって初めて身につく部分があるということです。例えば、私たちが子どもの時に自然と身に付けるというのは、話し言葉です。文字や文章を読み書きするというのには一定の訓練がいます。それは、計算というのが自然にできるわけではないのと同じです。昔の「読み・書き・そろばん」というのは、まさにそういうことです。ですから、話し言葉でも、アナウンサーのようなきちんとした話し方や発音をする、人ときちん議論をする、人前で話すというようなことは、やはり練習とか訓練とか勉強がいます。ここまでくると、なぜ国語の勉強というのは必要なのかということの、最も基本的な答えも分かってくると思います。それは要するに、言葉には、その基本的な性質として、意識しなくても自然と身につけてしまう部分と、そうではない部分がある、ということです。そして、国語の勉強をするというのは、結局のところ、訓練とか勉強によって初めて身につく、そういう部分について学ぶことだということになります。「日本語ができる」というのは、何も考えなくても無意識のうちにできてしまうという部分も多のですが、言葉はそれだけではないというわけです。もちろん、これだけを言っても、多分すっきりとした答えにはならないと思います。実際、例えば、中学とか高校で習う文法の授業というのは、五段活用とか、文節とか、助動詞とか、「なんでこんなこと勉強しなきゃいけないの?」と思ったことがある人はかなりいらっしゃると思いますし、私も実はその一人でした。しかし、それは、言葉に関して何を訓練すべきか、何を勉強すべきか、という、そういう一歩進んだ問題になります。今この場で、その点に踏み込む余地はありませんが、ここではとりあえず、「日本語ができるのに、何で勉強しなければならないのか」というこの問いが、言葉のごくごく基本的な性質、つまり何も考えなくても無意識のうちにできてしまうという部分とそうではない部分、その二つがあるということと結構深いところで結びついているのだ、ということをお理解いた

だければと思います。誤解のないように一つ付け加えたいのですけれども、言葉に関する訓練や勉強は、学校の国語の授業だけでやることではありません。日常生活の中で学ぶこともたくさんあります。その点に関して、私の個人的な体験談を一つお話しします。私は富山県の<sup>となみ</sup>砺波という所の出身で、大学は仙台です。そして今東京で仕事をしています。18歳で高校を卒業して以来、地元には帰っていません。もちろんお盆とか正月には帰りますけれども、富山で地域に密着した生活というのはしていません。ある年、お正月に帰省した時に、たまたま同級会がありました。早めに会場に着いたので、幹事をしている友人に「何かすることはないか？」と言ったところ、「井上は先生と仲が良かったから、始まるまで先生の相手でもやっててくれ」と言われたので、恩師と話をすることになりました。しかし、気軽に引き受けたのはよかったのですが、いざ話をしようとなると、話ができません。地元の言葉を話すわけですが、友人と話をすると、どうも勝手が違う。友人とは今でも完全に方言で話ができます。ところがその時、先生を相手にして話そうとすると、方言ではなく、標準語になってしまう。その時はとても不思議な感じがしました。これは、考えてみれば簡単なことで、18歳で富山を出てから、地域社会での生活の中でいろいろな人と付き合いながら、大人として言葉を使うことを学ぶ経験がストップしたからです。目上の人と大人同士で話すということは、標準語でしかやったことがないので、先生を相手にして話そうとすると、方言ではなく、標準語になってしまうわけです。これはとてもショックでした。そのとき、言葉というのは、単に子どものときに身につけたその言葉の基本的な仕組みだけではなく、生活の中で勉強し続けているということが実感できました。硬い話になってきたので、ちょっとここで息抜きをしたいと思います。日本語をテーマにすると、また硬い話に逆戻りしそうなので、雰囲気を変えて、中国語を題材にして、ちょっとしたクイズをやってみたいと思います。第1問です。「奔馳」。意味は分かるでしょうか。「奔走」の「奔」に「馳せる」です。これはヨーロッパのある有名自動車メーカーの中国語名です。字だけ見ると分からないと思いますが、発音すると何となく分かると思います。発音は「ベンチー (benchi)」です。もうお分かりになると思いますが、「ベンツ」です。「奔馳」はこれ自体「馳せる」という意味です。スピード感のある、なかなかいいネーミングだと思います。日本のサントリーの中国語名は「三得利」です。3回利益を得るという、非常にいい名前です。このようなおもしろい例は、企業名に多くあります。では第2問。「伊妹兒」。児童の児というのは発音を表すだけで、特定の意味はありません。これも、字だけ見ても分から

ないかもしれませんが、発音すると分かります。発音は「イーメール」です。つまり、「Eメール」です。「伊」は少し古い時代の言葉で「彼女」という意味です。「伊」と「妹」を組み合わせて、親しみやすい感じを出しています。最後にもう一つ。「カラOK」。「OK」とアルファベットを使っていますが、これは別にふざけているわけではありません。『人民日報』や辞書にもちゃんと載っている正式な表記です。発音すると「カ・ラ・オケ」です。そうです。カラオケです。中国の『現代漢語辞典』、「中国社会科学院語言研究所辞典編輯室<sup>しゅう</sup>」というところが編集した、日本でいうと『広辞苑』よりもっと権威のあるという感じの辞書にも、「カラOK」とあります。ちなみに、説明は「20世紀、70年代中ごろに日本で発明された一種の音響設備」となっています。ここであげた、「奔馳」、「伊妹兒」、「カラOK」には、言葉遊び的な要素があるように思います。中国語では、そういう言葉遊びが、日常生活の中で結構使われていて、とても面白いです。先ほども言いましたように、言葉というのは、一つのシステムですが、そのシステムというのは同時に、コミュニケーションの道具でもあります。これは、「ことばとはシステムだ」というのとは少し違う側面です。コミュニケーションの道具とは、人と関係を結ぶための道具です。その道具が、楽しくて粋であれば、それに越したことはありません。使って余り楽しくない単語は、余り使いたくない。それはコミュニケーションの道具としては余りよろしくない。中国語では、漢字の意味と音をうまく組み合わせて、楽しいコミュニケーションの道具を作っているわけです。結局硬い話に戻ったところで、テーマを日本語に戻したいと思います。今日の話の最初の方で、言葉というのは一定の仕組みを持った一つのシステムであり、私たちはその同じシステムを共有しており、お互いにコミュニケーションをとっているということを言いました。しかし実際には、それに反するようなことを感ずることもあります。それは、こういうことです。「最近の若者の言葉は、何を言っているのかさっぱりわからない。」私にも子どもが二人いますが、これに近いことをときどき思うことはあります。これは疑問というよりも悩みですが、この点について少し考えてみたいと思います。米川明彦さんという方が『若者言葉辞典』という本を出していらっしゃいます。若者言葉について、言語学的にきちんと分析した優れた本ですが、そこに出ている例をいくつか発音したいと思います。余り字で見ると面白くないので、口で言います。「チョベリグ」、「チョムカ」、「キモイ」、「ハズイ」、「メルトモ」、「ゲーセン」、「ヘルメコ」…。今とても一生懸命「チョベリグ」とか「チョムカ」とか「キモイ」とか言っているのですが、若い方が聞いたら、あの「チョベリグ」

という発音ヘン、とか言う人がきつといらっしゃると思います。これらの語は私にとって外国語みたいなものなので、当然と言えば当然のことです。ですが、よく見ると、その若者言葉というのも、メチャクチャなことをやっているわけではありません。例えば、「スノーボード」を「スノボ」と言ったり、「ゲームセンター」を「ゲーセン」と言ったりするのは、「パーソナルコンピュータ」を「パソコン」と言ったり、「アメヤ横町」を「アメ横」というのと同じやり方です。このような短縮はよく見られることで、「東京大学=東大」も同じです。それから、「チョコベリグ」ですが、これは「チャー・ベリー・グッド」を短縮したものですが、これは「東京工業大学=東工大」や「文部科学省=文科省」とまったく同じです。「デジカメ」,「ファミレス」,「プリクラ」,「ファミコン」,「キムタク」,全部同じパターンです。今言った中には、いかにも言葉遊びという感じがするものと、そうではないものがありますが、単語のつくり方そのものは同じです。つまり、「頭をとって略す」という、もともとあるやり方を、いろいろなところに応用しているだけなのです。次に、「キモイ」,「ハズイ」。これは「気持ち悪い」「恥ずかしい」を短縮したものですが、これらもめちゃくちゃやっているわけではありません。日本語の形容詞は、「あつい」「さむい」「きれい」「きらい」など、3音節のものがたくさんあります。それに合わせると、「気持ち悪い」は「キモイ」,「恥ずかしい」は「ハズイ」になるわけです。やはり、もともとあるパターンに合わせているわけです。変なことをやっているわけではなく、仕組みそのものは同じです。似た例をもう一つ例を挙げましょう。「コーヒー飲みに行かない?」を、「ねえ、コーヒーとか飲みに行かない?」のように「とか」を使って言うということが、一時期話題になりました。この言い方に違和感を覚える方も、余り感じない方もいらっしゃると思いますが、もし仮にこの「ねえ、コーヒーとか飲みに行かない?」に違和感を覚えても、次の「ねえ、コーヒーでも飲みに行かない?」には違和感を覚えないと思います。では、「とか」と「でも」がどれだけ違うかということ、実はそれほど変わりません。「コーヒーでも飲みに行かない?」は、「例えばコーヒーでも飲みに行かない?」ということであり、コーヒーでなければならぬというわけではなく、「(紅茶などでもいいのだけど、例えば) コーヒーでも飲みに行かない?」という感じです。つまり、これ、と限定するのではなく、一つの例として挙げるわけです。「とか」も、「コーヒーとか紅茶とか」というように、例を列挙する表現です。「でも」も「とか」も、例を挙げる表現という点では同じわけです。確かに、「ねえ、コーヒーとか飲みに行かない?」の場合は「とか」の使い方がちょっと

広がっているわけなのですが、仕組みとしては「でも」とそんなに違いはない。つまり、一つの例を挙げるといふ表現を使って和らげるという点では、同じことをやっているわけです。表現が少し違うだけで、仕組みは同じというわけです。最近よく聞かれる「～ってゆーかー」といふ表現も、ちょっと似たようなところがあります。「といふか」といふのは、相手の発言に関連する事柄を別な角度から述べ直す時に使います。それが機能の微調整が起こって、直前に述べたこととか、前の経験とか、それに関連することを別な角度から述べ直すという感じで、「～ってゆーかー」が用いられているのではないかと思います。「とか」の場合と同じく、もともとやっていることとそれほど違うことをやっているわけではありません。これまで使われなかったところで「～てゆーかー」が使われるということは新しいが、やっていることはそれほど違わない。普段やっていることを、ちょっと趣を変えてやっているだけなのです。若者言葉というのは、一種の言葉遊びです。先ほどの中国語と同じです。つまり、言葉というのはコミュニケーションの道具である。同じ使うなら楽しくて粋な道具の方がよい。そのような感覚が言葉遊びにあるわけです。しかし、言葉遊びのときに使う仕組みは、子どもの時に身につけた基本的な仕組み、そして、我々がもともとよく使っている仕組み、例えば形容詞は3音節が多いとか、略すときには頭をとって略すことが多いとか、そういう基本的な仕組みです。言葉遊びは、そのような基本的な仕組みを、ちょっと新しい形で応用しているだけです。ですから、「最近の若者言葉は何を言っているかさっぱり分からない」といふのも、要は「言葉遊びについていけない」といふことです。遊びについていけないといふだけの話で、若者と若者ではない人の言葉の仕組み自体が違っているわけではまったくないわけです。「ことばはコミュニケーションの道具である」といふことからすると、若者の言葉というのはよく分からない。意味が分からないからコミュニケーションがとれない、全然違う、ということになります。しかし、少し視点を変えて、「ことばはひとつのシステムである」といふ側面から考えると、言葉遊びで用いられる仕組みは、我々がもともと使っている仕組みであり、仕組みそのものには大した違いはありません。若者言葉も、どのような側面から見るかということ、随分結論が違ってくるわけです。言葉にはいろいろな側面があります。こういう側面もあれば、こういう側面もある。どのような側面から考えるかで結論は違ってきますが、いずれかの結論が間違っているというわけではありません。結論自体はどれも正しいのです。さて、今ここでは、若者の言葉と若者でない人の言葉は違うが、それは言葉遊びのレベルの話であると言いました。

しかし、言葉の世代差の中には、言葉遊びではない、もっと重いものがあります。そういう点について、研究開発部の三井はるみさんにお話いただきたいと思います。

**三井** 重い違いというと、一体何だろう？ というふうに考えられるのかもしれませんが、取り上げること自体は、大変よく耳にしますし、あるいは話題に上ることも多い題材をお話したいと思います。今、言葉の仕組みですとか構造というお話がありましたけれども、言葉の仕組みがあるために、あるいはそこが原因になって、言葉が変化していくという例の一つとして、言葉の変化ですとか、あるいは違和感がちょっとある言葉としてもよく話題になるのですけれども、一般に「ラ抜き言葉」というふうに言われている、そういう一群の言い方について取り上げてみたいと思います。「ラ抜き言葉」という言い方で、「ああ、あの言い方か。私もあの言い方はちょっと気になるんですよ」という方もいらっしゃると思うんですね。あるいは、「いや、どういう言い方のことだろう？」という方も、あるかもしれません。一般に「ラ抜き言葉」というふうに言われている言い方、これは「着られる」とか、「食べられる」という言い方ではなくて、「着れる」とか「食べれる」という言い方をします。そのときに、「着れる」とか「食べれる」という言い方は、「ら」が抜けているということで、「ラ抜き言葉」という命名がされたようです。意味は、「着ることができる」とか、「食べることができる」という、可能の意味、「～することができる」という意味を表す、そういう言葉ですね。言葉の仕組みそのものに原因があって、言葉が変わって行って、言葉の違いが生まれた、新しい言葉が生まれた、という例として、どうして「ラ抜き言葉」が生まれてきたかということ、更に方言のことと関わらせながら、ちょっとお話してみたいと思います。あるいは、このことについて、学校の授業などで取り上げられて、耳にしたことがあるという方もあるかもしれませんね。その場合、復習のつもりで聞いていただくという方もあるかもしれません。さて、先ほど言いましたように、「着れる」とか「食べれる」という言い方にはとっても違和感があるんだ、という方もあるでしょうし、え、どこがおかしいの？という方もあると思います。さらに、「ラ抜き言葉」というのは「着れる」とか「起きれる」とか「食べれる」とか、いろいろな動詞についてあるわけですが、「着れる」というのは使うけど、「起きれる」というのはそういえばあんまり使わないかもしれない、とかですね、「着れる」とも「起きれる」とも「食べれる」とも言うけど、「助けれる」とか「考えれる」というのは変かもしれない、とかですね、そういう方もいるかもしれませんね。さらに、いろいろな言葉を後にくっつけたりして、「助けれもしな

い」とか、「考えれそうにない」なんていうふうになると、ますますおかしいと思われる方があるかもしれません。こんなふうには、人によって違和感があるかどうか違っていたり、それから、違和感の有る無しが語によって違っていたりというのは、これはこの言い方が今変化して生まれてきて、そして広がりつつある、そういう言い方だから起きるのだと思います。では、この「ラ抜き言葉」は、最近の言い方とも言われるのですが、実は東京ですと、昭和の初めぐらいからぼつぼつ聞かれ始めたというような報告もありますので、新しいとはいっても、かなり時間が経っている。昭和の初めといいますと、70年以上前になりますので、それが70年ぐらい経って、今こういう状況になっているということですね。では、どうして「ラ抜き言葉」という新しい言い方ができてきたのかといいますと、これはさっきの井上さんのお話と関わってくるのです。ちょっと言葉の構造とか仕組みというところに話がいて、ややお勉強風になるかもしれないですけども。「ラ抜き言葉」が生まれてきたのは、実はその言葉の仕組みの上に、そもそもそうなる原因があったというふうには考えられます。さっきちょっと学校の文法の授業の話がありましたけれども、一段活用とか五段活用というふうには、日本語の動詞はいくつかのグループに分かれますね。例えば、「着る」というこの単語でしたら、「着ない」とか「着ます」とか「着る」とか「着ろ」とか「着よう」とか、こんなふうにはいろいろなふうには形が変わるわけですけども、この中の「着」という部分は、ずっと変化しないわけです。こういったふうには、「着」という、イ段の音、あるいは「食べる」でしたら「べ」という、あそこ（注：スライド）で赤くなっていますが、「エ」段の音で変化しない部分を持つ動詞を、一段活用動詞というふうには言います。学校の文法の授業を、ちょっと思い出してみてください。「ラ抜き言葉」の問題になるのは、この一段活用動詞と呼ばれるグループの動詞についてです。「着れる」とか「起きれる」とか「食べれる」という言い方ですね。一方、「ラ抜き言葉」が問題にならない動詞もありまして、例えば鋏で切るの「切る」なんかは、これは「切れる」というのは、恐らくこれは違和感があるという方はいらっしやらないと思うんですね。この動詞は、さっきの洋服を着るの「着る」とは違って、「切らない」「切ります」「切る」「切れ」「切ろう」なんていうふうには形が変わって、あそこに赤くなっていますが、「ら・り・る・れ・ろ」というふうには、五段に形が変わるので、普通「五段活用」という名前です。この他に日本語には「カ行変格活用」「サ行変格活用」とありますけれども、ちょっとお話が複雑になるのでそこは置いておきまして、大部分の動詞は一段活用か五

一段活用か、どちらかの変化の仕方をするわけです。それで問題は、一段活用の動詞に、今「ラ抜き言葉」という言い方が起こってきているということです。では、なぜそれができてきたのかということを見てみます。「ラ抜き言葉」が生まれた原因というのは、一段活用と五段活用という動詞の違いによって、可能の言い方の作り方が違ったというところに原因があると言われていています。こちらの下の方ですね。五段活用の動詞で見ると、鋏で切るの「切る」。これを可能の言い方にすると、「切れる」というふうになりますね。「この鋏はよく切れる」となりますね。この時、私たちの頭の中では、どういうふうにしてその可能の形を作っているかという、ローマ字で書いてみましたけれども、「kiru」という動詞があると、一番最後の「u」というのを取り外しまして、「eru」というのをくっ付ける。そうすると「kireru」という可能の言い方ができます。「走る」も「読む」も同じですね。一方、一段活用動詞の場合は、これはもともとの作り方はこんなふうになって、「k i r u」という動詞があると、ローマ字の最後の「u」を取り外して、先ほどよりは少し長い「areru」という形をくっ付けると、「kirareru」という、もともとの可能の言い方が出来上がります。つまり、この一段活用の場合と、それから五段活用の場合、つまり同じ動詞でも、どんな活用をするのかによって、可能の形の作り方というのは違っていたのですね。そこに新しい可能の作り方が出てきました。新しい作り方。これは、洋服を着るの「着る」が「着れる」となる言い方ですね。このとき、私たちの頭の中に何が起こっているかという、 「kiru」の最後の「u」を外して、「eru」をくっつけます。そうすると「kireru」というふうになりますね。さてこれは、先ほどの五段活用の場合と同じですね。「u」を取って「eru」を付ける。「着れる」とか「起きれる」という「ラ抜き言葉」と言われる言い方は、何となく新しいような気がしても、作り方自体は前々から、五段活用という別の動詞ではやっていたやり方。それを、一段活用でもやるようになったという、そういう言葉の仕組みが変わったという、そういう変化なのです。考えてみれば、同じ動詞なのに、動詞のグループによって可能の言い方を作るのに二つやり方があるというのは、一つのやり方だけであるというのに比べて複雑です。今見たように、五段活用でも一段活用でも、動詞だったら何でも同じようにすれば可能の形ができるというのは、仕組みが単純になっているということで、こういったことを「ことばの経済」なんていう言い方で言う方もあります。つまり、ルールが単純に一本化することで、記憶の負担なども減ったりする。説明するのは難しいところもありますが、一つの説明として、そんなふうにも考えることもできる

と思います。さらに、「ラ抜き言葉」ができたことで、いいこともあるのですね。これは原因というわけではなくて、「ラ抜き言葉」ができたお蔭で、こんなことができるようになりましたということですから。先ほど、「着れる」とか「食べれる」という言い方に、違和感のない方もいらっしゃるよ、というお話をしました。そういう方の中には、もしかすると、「『食べれる』だったら可能の言い方だけど、『食べられる』というの意味が違うんじゃないか」という方があるかもしれません。「食べられる」と言うと、例えば、「冷蔵庫にケーキを隠しておいたのに、妹に食べられた」とかですね。例えばそんなふうに、誰かに何かをされた、つまり受け身という意味、それを表す言い方なのではないかと思われる、そう感じられる方が、多分いらっしゃると思います。「ラ抜き言葉」ができる以前は、一段活用の動詞では、「食べられる」とか「着られる」という言い方で、受け身の言い方も可能の言い方も同じ言い方で済ませなければならなかったのです。ところが、新しく「着れる」とか「食べれる」という言い方が出来たので、おかげで、その二つを言い分けられるようになった。ですからそういった面でも、意味をはっきりと言い分けるのに役に立つような、そういう言葉が新たに生まれたというふうに見ることもできると思います。ところで、このような「ラ抜き言葉」というのは、なにも、先ほど東京では昭和の初めぐらいからぼつぼつ見られたというお話をしましたが、東京だけで起こっている変化ではありません。それどころか、全国の方言を見渡してみますと、むしろ東京よりもずっと早くラ抜きの言い方が広まって定着している、そういう方言を非常に多く見ることができます。皆さんの御手元の資料の、最後の方に地図が載っていると思うのですが、ちょっと見ていただけますでしょうか。何とかカラーできれいなものを作ろうと思ったのですが、かなり細かい記号だったりして、もしかすると見づらくもしいかなののですけれども、すみません、御容赦ください。2枚ある地図のうち、ここでは最後の図-2の方を見ていただきたいと思います。これが、今話題にしています「着ることができる」、共通語で一段活用をする動詞の可能の言い方を、全国でどういうふうにするかということ調べて地図にしたものです。私どもの研究所で1970年代から80年代にかけて、全国で方言についてお尋ねした結果を地図に表したものです。大正の末以前に生まれた方に聞いていますので、今の御年齢でいうと75歳以上ぐらいの方でしょうか。各土地のそういう方にお尋ねした、そういう結果をまとめてあります。ただ、これは細かくて見づらくもしいかなののです、そちらは後でじっくり見ていただくことにしまして、ちょっとスクリーンの方に注目していただけますでし

ようか。その「着れる」という言い方だけを抜き出したものを用意しました。話はこちらの方でいたしますね。その御手元のものから、赤い記号だけを抜き出してあります。赤い記号というのは「着れる」という、ラ抜きと言われる言い方ですから、その言い方が全国の方言の中でどのぐらい使われているかということを示しています。これを見ますと、北海道から、ずっと四国、あるいは中国地方辺りまで、ちょっと濃淡の差はありますけれども、かなり「着れる」という言い方が使われている、割と多いなというふうに思われるのではないのでしょうか。ただ九州より南の方には余りこの「着れる」という言い方はないんですね。九州より南の方では、五段活用の「読むことができる」なども、「読める」とは余り言わなくて、では何と言うかという、「読まれる」という言い方をする所が多いわけです。それから、東北地方もばらばらとしか赤い記号がありませんが、これは東北地方には別の言い方で、「着るにいい」、「～い」という言い方で、着ることができるという意味を表す、別の言い方がありまして、そんなこととの関係があると思います。そういった別の言い方が特にある所を除きますと、「着れる」という言い方をしない所の方が、実は限られていて、一つは関東地方の辺り、この辺がかなり空白ですね。それから、もう一つは近畿のこの辺ですね。京都を中心としたこの辺りが空白になっています。つまり、他の言い方が特にある場合を除けば、「着れる」という一段活用の言い方は方言では、実は定着している所がかなり多くて、逆にそれを使わないのは、近畿とかあるいは関東とかいった所だと、そういうふうに言うことができると思います。これはどういうことかと言いますと、多分この「着れる」という言い方は、ある時生まれてきたのだと思うのですけれども、そういった新しい言い方に対して、そういう新しい言い方は、ちょっと気になるなあ、正しくないんじゃないか、というような、そういう意識が割と強い地域と、それから余りそういったことに頓着せず、そういった変化が生まれたなら生まれたなりに進んでいくという、そういった地域と、そういったものがあるのではないかと。そして、関東や近畿以外のこういった、例えば中部とか四国なんかは特にそうなんですけれども、どんどん、どんどんラ抜きの変化が進んで、今ではラ抜きだけが普通の言い方というふうになっている。そんなふうに見てとれるのではないかと思います。先ほど、このラ抜きというのは、一段活用と五段活用の動詞が、同じ形になってしまうという変化だというお話をしましたけれども、方言にはそういう例は非常にたくさんありまして、例えば、この場合の洋服を着るの「着る」でしたら、人に命令するときですね。共通語では「早く着ろ」というふうに言いますけれども、北海

道とか、あるいは東北の日本海側では、「早く着れ」という所が非常に多いです。考えてみますと、この「着れ」なんていう言い方も、鋏で切るときの「切れ」とアクセントは違いますけれども、形は同じになってしまって、方言ではそういうふうには、活用の種類にかかわらずに言い方が同じになるという例が、いろいろ見られるようです。方言というのはどうも古いものを残しているというところに目が向きがちですが、かえってこうやって新しい言葉の変化がどんどん進んでいるという側面もあるということを、ちょっとお見せしたいと思ひまして、お話をいたしました。

**井上** どうもありがとうございました。今、三井さんの方から「ラ抜き言葉」に関して説明をしていただきました。また、先ほどは私が「若者言葉」について少し解説をしました。「若者言葉」に関して、「ラ抜き言葉」についても、理由があることが分かりました。普通は、原因が分かればすっきりと万事解決といくものです。しかし、言葉というものはなかなかそういうわけにはいかない。つまり、理屈は分かっても、やっぱりどうも自分の言語感覚と違うものに接した場合には、違和感がある。その違和感というのは、理由が分かったからなくなるものではありません。言葉というのは、感覚と関係するところがかなりあります。そして、感覚というものは理屈で変わるものではありません。ある言葉が気になる人は、何をどう説明してもやはり気になる。気にならない人はもともと気にならない。理由が分かったところで違和感がなくなるものではないし、理由がわかって逆に違和感を覚えるわけでもありません。これは、個人のレベルにおける文化摩擦みたいなものです。つまり、頭で分かっても感覚がついていかなければどうにもならない、というところ、これが言葉の第三の側面といえると思います。一言で言えば、「ことばは内なる文化である」ということになると思います。言葉というのは文化であり、文化というのは感覚です。だから、理屈では分かっても、感覚がついていかなければどうしようもない、そういう側面です。これは、言葉が一つのシステムであるとか、言葉はコミュニケーションの道具であるというのとは、少し違います。文化ですから、例えばご飯にマヨネーズかけているのを見てエッと思う、あの感覚です。その違和感も、マヨネーズをかける理由が分かったからといって変わるものではありません。「いや、ご飯にマヨネーズかけたらおいしいんだよね」と言われても、そう思わない人はやはりそうは思わない。文化は基本的に保守的です。言葉は変わります。つまり新陳代謝します。しかし、個人のレベルではそんなにコロコロ変化するわけがない。言葉も同じです。基本的に言葉というのは保守的なものです。そのことを示す例を一つだけ挙

げましょう。私は数字の「七」を「シチ」とは発音できません。どうしても「ヒチ」となってしまいます。私は大学の時に奨学金を受けることができました。手続きの際に、振込先の銀行の名前を漢字とカタカナで書かなければならない。仙台の「七十七銀行」という銀行名をカタカナで書くときに、私は迷うことなく、「ヒチジュウヒチ」と書きました。何となく「？」と思って辞書を見ると「シチ」となっている。しかし、よほど意識して話さないで「シチ」とは言えない。「シ」とは言えますし、「質屋」とは言えるのですが、「七」はどうしても「ヒチ」になってしまう。発音というのは一種の技能ですから、いったん技能として身につけてしまうと、それを矯正するのはなかなか難しいのです。また、「本日は国語研へようこそ」というときの助詞の「は」ですが、これも発音は「わ」ですが表記は「は」です。これを発音に合わせて、「本日わ国語研へようこそ」と書くと、かなり違和感があると思います。その違和感は、1週間たてばなくなるというようなものではありません。「王子」は「おうじ」、「大きい」は「おおきい」と書きます。同じ「オー」でも、一方は「おう」と書いて、もう一方は「おお」です。これは、旧かな遣いの違い、「王子（おうじ）」は旧かなでは「わうじ」、「大きい（おおきい）」は旧かなでは「おほきい」という違いを反映したものです。発音は同じなのに、以前の仮名遣いの違いをちょっと残しているというのは、中途半端な感じもしないではありません。何で全部いっぺんに変えないのだ？とも思います。しかし、実際はそういうものではありません。言葉というのはやはり基本的に保守的なものであり、一気にがらっと置き換えるというのは、土台無理な話なのです。言葉というのは文化です。文化は保守的です。となると、言葉と付き合う時には、自分の内なる文化としての言葉だけではなくて、自分とは異なる「外の文化」とうまく付き合うことが必要になってきます。内なる文化を主張することだけではなくて、自分とは異なる外の文化、外の言語感覚というものも尊重しなければいけない。例えば、先ほどの「ラ抜き言葉」です。三井さんが説明されましたように、言葉は一つのシステムであるという観点からすると、「ラ抜き言葉」は非常に合理的なシステムです。つまり、それを否定することは、言葉の体系性や合理性を否定することになります。言葉は一つのシステムだという観点からすると、「ラ抜き言葉」を全面的に否定するのは、不自然です。しかし、言葉は内なる文化の一つです。そのような観点からすると、「ラ抜き言葉」に抵抗を感じる人、抵抗を感じない人がいるのは当然です。慣れない限りどうしようもない。つまり、「ラ抜き言葉」を無条件に肯定することは、そういう「内なる文化」を無視することになるわけで、それ

はそれで不自然なことです。結論はまったく違いますが、いずれも言葉が持つ複数の側面に対応した結論です。互いに矛盾しているように見えても、一方だけが正しく、もう一方は間違っている、というものではありません。我々ができることは、「ラ抜き言葉」が持つそれぞれの側面を理解した上でお互いに議論することしかないのです。「ことばの乱れ」と言われる表現、言葉の体系性・合理性という点から言うと非常に自然なのだけれども、言葉の文化的な側面、それぞれの内なる文化の一つであるという点から言うと、全面的に肯定的できないというものが少なくありません。本当に乱れているものは直さなければいけません。しかし、自分とは違うものであっても、ある程度意にかなったものであれば、それはやっぱり頭の隅に入れておく必要があります。本当の乱れかどうかを見極めないといけないわけです。我々は国語の授業で「文法」をやりますが、実は文法はこういう時に役立ちます。言葉を客観的に見て、その乱れらしきものが本当の乱れなのか、それともちょっと乱れたように見えるだけなのか、本当は合理的なのか。それを見極める目、それを養うのに「文法」はとても役立ちます。言葉を客観的に見つめるというのは非常に大切なことです。私ども言葉の研究者が社会に貢献できるとすれば、この点にこそ存在理由があるのではないかと思います。

今日は、三つのことをお話ししました。

- ・「ことばはひとつのシステムである。」
- ・「ことばはコミュニケーションの道具である。」
- ・「「ことば」は使い手一人一人の中にある「ウチなる文化」である。」

恐らく、日常生活のいろいろな側面で言葉に関する疑問が生ずると思います。その時は、単に答えだけを求めるのではなくて、その疑問が言葉のどの側面と関係するかということのを是非考えていただきたいと思います。なぜなら、どのような側面から言葉を見るかで答えが変わってくるからです。言葉にはいろいろな側面がある。その側面に応じて、いろいろな結論が出てくる。それぞれの結論が矛盾するように見えることもある。答えが一つ出たところで終わりなのではなく、実はそこがスタートラインです。他の側面から見たら違った結論が出てくる。それをどう折り合いをつけるか。それが言葉とうまく付き合う上で最も大切なことです。最後に宣伝を一つ。『新ことばシリーズ』という冊子を年に一回作っております。解説編と問答編があり、昨年の解説編は『豊かな言語生活のために』という冊子です。今年も『「ことば」を調べる・考える』という冊子を作りました。今日お話した内容は、その中に書いたことをいろいろ利用しております。

今日話したことをより具体的に知りたいという方がいらっしやいましたら、是非現物を休憩時間にでも見ていただければ幸いに存じます。ありがとうございました。(拍手)

**司会** それではこれから休憩に入りますが、ちょっと時間が延びてしまいましたので、これから15分だけ、休憩したいと思います。後半の質疑応答はこの前の時計で45分から始めます。35分ちょっと過ぎぐらいまでに質問票を後ろの回収箱に入れていただきたいと思います。なお、後ろのほうとロビーにいろいろ展示しておりますので、どうぞ御自由にご覧ください。飲み物は、1階の自動販売機がございます。喫煙はロビーの後ろの方と1階に喫煙所がございます。それでは、これから休憩に入ります。

<休 憩>

### 【質疑応答】

**三井** ……「よう泳ぐ」とかいうふうに、「よう〜」という言い方で、可能の意味を表しますが、これは御質問の中でいうと、「よう泳ぐ」でしたら、泳ぐ力があるから自分の力で泳げるという意味で使われるようです。それから、先ほどの東北地方で、「着る」に「い」なんていう言い方がありましたけれども、あれは逆に、子どもがある程度大きくなったから、自分の力で服を着られる、なんていう時には使わないというふうなことがあります。この意味によって使う表現が違うというのは、各地の方言にはよく認められると思います。

**司会** 御質問いただいたお二方、よろしいでしょうか。何か、追加御質問があれば、挙手をお願いいたします。では、次の質問にまいります。先ほど、国語を勉強しなければならぬという面と、言葉は内なる文化であるという話をしました。それに関連しての質問ですので、井上さんに答えていただきます。

**井上** これに関しては、お二方から頂きました。まず、「その内なる文化としての言葉というのは、世代間で伝承していくものかと思われるけれども、とくに教育者はどのような態度、意識でいるべきであろうか」という御質問です。それからもうお一方から「どうして国語の勉強をしないといけないのか」という問いを発する人が期待する答えというのは、私が言ったような、「言葉には訓練などによって初めて身につく部分があるから」という、分かったような分からないようなことではなくて、「国語を勉強すれば〜ができるようになる」という具体的なことではないか」という御質問です。まず、後者の御質問からお答えしたいと思います。確かに私が言った答えというのは、ちょうど「なぜ

山に登るのか」と言われて「そこに山があるから」と言うのと同じです。つまり、なぜ国語の勉強をするのかと言えば、それは「国語の時間に勉強すべき事柄が多分あるから」ということしか言ってないわけです。「国語を勉強すればこれができるようになる」とか「これになれる」というのは、その次の段階の問題です。これに関しては、いろいろと考えなければいけないことがあると思います。まず、「～ができるようになる」という時に、それが見えるか見えないかということですね。例えば、計算の場合は、計算できなかった、あるいは、足し算を間違えてばかりいたのが正解が出るようになった、割り算のやり方が分かってきた、これまで5分かかったのが2分ですむようになった、など、成果が目に見える形で出てきます。しかし、国語、特に文法を勉強して何ができるようになるかといったら、それはつまるところは、言葉を客観的に見ることができるようになる、としか言いようがないと思います。では、その言葉が客観的にできるということは、より具体的に言うときどういふことになるかということ、これはいろいろありうると思います。言葉に関して何か疑問を感じた時にそれにうまく対処できる、ということも、その一つかと思います。あと例えば、どこかの方言を聞いた。自分の言葉とは違う。その違いはどこにあるかということまで考えることができたりする。あと、言葉にはパズルのようなところがあります。我々が英文法を勉強して、英語を書く時などは、どの単語をどこに並べればいいのかということ結構考えます。あれこれ並び替えたりもします。同じようなことが実は、日本語にもあります。ちょっと語順を変えると文としておかしくなるということがよくあります。そのようなことを通じて、その言葉の構造とかが分かったりするということがあります。それが人生においてどういう意味があるかは、また別問題だとは思いますが。ですから、余りいい答えではないかもしれませんが、国語を勉強すればこれができるようになるということ自体が、必ずしもはっきりしていないところがあるわけです。もう一つ。「内なる文化の伝承」ということですが、これは、重なる部分を有しながら伝承していくのだと思います。重なる部分なしにまったく変わってしまう、以前とは断絶してしまう、ということはありません。一見断絶しているように見えても、必ずどこかは重なっている。その重なっているところと重なっていないところを、まずはある程度きちんと意識する、客観的に見ることが大切なのですが、それをどのようにして教育の場で教えるかというのは、なかなか難しい問題です。漠然とした答えですが、まずは今述べたことをお互いに理解しあう、自覚するということが一番大切なことだと思います。

**司会** 御質問いただいた方、よろしいでしょうか。それでは、次の質問に行きます。植木さんが音声認識ソフトを使って、ちょっと実験をやりました。その音声認識ソフトについて、御質問を頂いております。

**植木** 質問は2点いただいています。まず1点目は、先ほどの実験の時に使ったソフトというのが、具体的にどういうものか、一般向けに発売されているものかという御質問ですけれども、今日実験的に見ていただいたのは、IBM のほうから商品として発売されています「ピアボイス」というソフトです。今日はああいうかたちで実験で使ってお見せしましたけれども、もともとその商品自体の目指すところとしては、キーボードが使い慣れない方が、キーボードから文字を入力する代わりに、普通に話すようにしてコンピューターに文字を入力するためのソフトとして発売されているものですので、一般のコンピューターのお店に行けば売っております。また2点目として、今日は人間の話したのを文字にするソフトをお見せしたわけですけれども、それ以外に例えば音声の高低を表すようなソフトがあるかという質問をいただいています。音声の高い低いを示すことだけを目的にしたソフトという意味では、ちょっとないわけですが、話し言葉で文字を入力するのに比べて、音の高い低いだけを見たいという要求というのは普段余り生じてこないものですから、それ単体で動くソフトというものはないのです。しかし、コンピューターの上で、先ほどのソフトなどでもそうですけれども、音声で入力した場合には中では実際に分析をしていますので、分析の過程で音の高い低いであるとか、どういう音が入力されたのかというのを表示するソフトなどはあります。ですが、まだ研究用の割と限られた範囲で使われているものばかりでして、一般のソフトというかたちではちょっと、現在のところはないというので、今回はお答えになっているでしょうか。

**司会** よろしいでしょうか。では、次の質問にまいります。これは私に宛てた質問ですので、私がお答えします。今日司会の私は、「よくおいでいただきまして」と言いました。よく聞いていらっしゃるね。それに対して、次に発言した所長は、「おいでくださいまして」と言った。同じことを、私は謙譲語で「おいでいただきまして」と言った。所長は「おいでくださいまして」という尊敬語で言った。どちらが丁寧でしょうか。御手紙をお書きになる時にお悩みになるそうです。これは、私が使った「おいでいただきまして」というのは謙譲語です。私の側がへりくだることによって、今日おいでいただきました方々に敬意を表すという、ちょっと複雑な操作をやるわけですね。その複雑な操作をするから私の方が頭がいいとか、そういうことではないですよ。へりくだりの気

持ちを表して、敬意を表すということをやっているのですね。それに対して、所長は「おいでくださいまして」という尊敬語を使いましたので、ストレートに、今日おいでいただいた方々に敬意を表しています。今日ここまでお運びいただいたという、その行動に敬意を表しているということですね。お気づきになったかと思いますが、最近、JR東日本が、「JR東日本を御利用くださいまして」という尊敬語を使った言い方に変えています。以前は、「ご利用いただきまして」という謙譲語を使った言い方でした。どっちがいいか悩んだJR東日本から、私に質問がきたのです。どっちがいいでしょうか。どちらも正解、正しい使い方です。謙譲語の方は、へりくだって敬意を表すということですから、一般にはちょっとだけ謙譲語の方が丁寧と感じられるかもしれません。それは受け取る人の感覚次第ですけれども。そういう説明をして、どちらもいい敬語ですとお答えしたら、言いやすい「御利用くださいまして」にしますと自ら判断されて変わったのです。これにつきましては、今日は余り詳しくお答えできませんが、6月に私どもで『新ことば』シリーズ』14『言葉に関する問答集』を刊行する予定になっております。そこに「尊敬と謙譲の使い分け」ということで書いておりますので、どうぞそちらをご覧くださいと思います。続きまして、これもまた私に対する質問です。「お疲れさまです」ってよく言いますよね。とくに若い人、運動部の人などは、「さようなら」とは言わないで、「お疲れさまです」と言って（笑）、別れの挨拶に使ったりしていますけれども、その「お疲れさま」というのは、目上の方に使ってよいでしょうか。いけないならば代わる言葉を教えてください」という御質問です。これも、先ほど申し上げました『新ことば』シリーズ』でちゃんと取り上げておりますので、簡単にお話します。もともと、日本語の敬語の習慣に、目上の人をねぎらうという習慣がなかったのです。こういう「お疲れさま」などというねぎらいの言葉は、上司がよく働いてくれた部下に言うのがあたりまえだったのです。それで、やっぱりどうも年配の方々は、私などもそうすけれども、「お疲れさまです」と言われると、なんていうか……おまえからねぎらってもらいたかねえわい、というような感じになるんですね。（笑）私も大学にいたときに、学生が「お疲れさまです」とよく言うので、「おれの前ではお疲れさまなんていうな。おれは若くて疲れてないんだ」なんて、ひねくれたことを言ってました。目下が目上をねぎらうという習慣がなかったために、ちょっと違和感がある、違和感を持つ人がいらっしゃるということです。……あ、代わりの言葉ですね。代わりの言葉は、やっぱり上司に対しては、ねぎらうのではなくて、常に感謝の心で接した方がいいと思

ます（笑）。だから、代わりの感謝の言葉を、何かうまく考えておっしゃるといいのではないかと思います。……「今日は感謝します」ではちょっと芸がないので、「今日のご指導ありがとうございました」とかね。（笑）あるいは、例えば上司より先に帰るという場合は、まだ上司は働いていらっしゃるわけですから、それで自分は先に帰るわけですから、「すみませんが、お先に失礼いたします」とかね。上司もいろいろですから、ねぎらわない方が無難ではないでしょうかね。（笑）（会場から質問）はい、どうぞ。

**参加者 1** ぼくは、上司に対して「御苦労さま」という場合は、今おっしゃったねぎらいの言葉になるので、「お疲れさま」という言い方もいいのではないかなというようなことを何かで読んだような気がするのですがね。そういう使い方でもろしいのではないのでしょうかね。余り、今おっしゃるようなことを言ってすべてねぎらいにしてしまうと、では代わりの言葉は何かというのに、答えはないわけですよ。

**司会** そうですね。

（会場から意見。聴取不能）

**司会** そうですね。だからやっぱり、気持ちですよ（笑）。言葉より気持ち。上司の方を、よく見て、この自分の上司は、私みたいに「お疲れさま」と言うと嫌がる上司か（笑）。そのへんをお考えになるのも、大切な相手に対する配慮だと思います。対人関係はいろいろですから、一律に、これはだめだとか、こっちがいいとかいうのは、なかなかこの場で言えないのではないのでしょうか。いろいろ工夫なさったらいいと思います。

（会場から意見） はい、どうぞ。ちょっとマイク持ってきてください。

**参加者 2** 「お疲れさま」でなくて、「お疲れでした」という言い方があるというふうに聞きましたけど、これもねぎらいになりましようか。

**司会** はい。とくに体育会系は「お疲れです！」と、こんなふうに短く言ってます。だから、実際あるわけですね。どこまでねぎらっているかは分かりませんが。文字どおりの意味は、疲れてますね、というだけのことでしょ。（笑）今みたいに挨拶の中身を追及すると、例えば「さようなら」と言うのは、「左様しからばこれにて御免蒙<sup>ごまか</sup>り候」でしょ。それだけのことを言っている。挨拶というのは、そういうふうに定型化されていて、余り意味を追求しないで使うというふうな習慣がありますし、人によって受け取り方もさまざまです。一律なことはなかなか言えません。お一人お一人工夫なさった方がいいかなと思います。よろしいでしょうか。

**参加者 3** JR 高崎線で電車を待ってますと、「電車がまいります」という言葉を使います

けど、自分らの電車に対して「まいる」という敬語を使っているような感じがしますが、これはどんなものでしょうか。

**司会** それは、電車がへりくだって走ってくるという、謙譲語ではありません。謙譲語から転用された丁重語、つまり改まった言い方ですね。と、お考えいただきたいと思えます。これも、こんどの『『新ことば』シリーズ』に入っております。「そういたします」とか言うときも、「いたす」というのはもともと「する」の謙譲語ですけれども、「そうします」というのを、もうちょっと改まった言い方をしたというふうにお考えいただきたいと思えます。……すみません。もう既に、以前の「ことば」シリーズに載っているそうです。お客様に対して、ちょっと改まった気持ちを表す丁重語です。丁寧語と同じような働きです。聞いている人に敬意を表すものですね。大分時間を超過してしまいました。私のところで、なんかいろいろ脱線しましてすみません。最後にもう一つだけ。若者言葉について、井上さんに質問が来ていますので、よろしくお願いします。

**井上** 「若者言葉は言葉遊びであって、仕組みそのものには大きな違いはないということだけではちょっと危険な気がする」というご意見です。この方は、自分は「キモイ」、「ハズイ」、「ウザイ」のような短い言い方ばかりを使っている、もっときちんとした言い方を使いたくてもうまく使えない、という悩みをお持ちなのではないかと推察します。この気持ちはよくわかります。私も早口ですが、最近の若い方の話し方は全体として早口だと思います。短い時間でいろいろなことを言おうとする。当然、言葉も短くなります。それで、もし短い言葉ばかり使うことに関して自分自身「いいのかなあ」と思うのであれば、それはやはり自分で訓練をして慣れるしかないと思います。言葉というのは先ほど申し上げましたように、ある意味では感覚です。感覚というのは慣れなければどうしようもない。また、言葉を話すというのは口を回すということですから、やはり慣れないといけない。となれば、例えばゆっくり話してみるとか、ちょっと意識的に長い形容詞を言ってみるとか。そうするしかありません。そのうちだんだん慣れていって、それなりにきちんとした言い方が言えるようになるということだと思います。自分が慣れていないことを習得しようと思ったら、やはり意識的にやるしかありません。外国に住んでいるが、付き合っているのはみんな日本人であるというのでは、外国語が上手になるはずはないのと同じです。やはり、外国人と直接話をしないと、つまりふだんと違うことをやらなければいけません。ちょっとゆっくり話をしてみるとか、人前で話をする機会を自分なりに増やすとか、いろいろな工夫ができると思います。そのあたりは学

校で勉強することではなく、自分で工夫すべきことだと思います。そして、どうすれば自分は今できないことができるようになるかを考える際には、言葉というのはどういうものかということを知っていることは重要なことだと思います。今日お話したことというのは、すぐに役立つということではありません。しかし、頭の隅にどこか入れておいていただければ、どこかで思い出していただけることが含まれていると思います。今日のフォーラムの内容もそのようにご理解いただければ幸いです。

**司会** 他にもたくさんの御質問をお寄せいただきまして、ありがとうございます。私どもの不手際で 15 分も超過してしまいまして、大変申し訳ございません。ここでいったん、今日のフォーラムを終わりますが、お詫びに研究所の所員が前の方に残りますので、質問票に書いていただいてお答えしなかった方々、それから、なおもっと聞きたいとお思いの方、時間の許す限りお付き合いください。本日はどうも、長時間にわたりまして「ことば」フォーラムにお付き合いいただきまして、本当にありがとうございます。これにて終わります。（拍手）

<終了>